
青光

まーなぐるむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青光

【Nコード】

N5651Y

【作者名】

まーながるむ

【あらすじ】

なあ、新自由国民党って知ってるか？

（前書き）

三人称形式で書こうかと思ひまして練習です。ちょい狂った系ホラ
ーなので苦手な方は以下略

少年が庭に水を撒いている。庭は整えられてはいるものの土が露出し、華やかさも足りないため、もしかしたらまだ引越してきたばかりなのかもしれない。

「まあ、こんなもんか」

少年は軽く庭を見渡して水を撒いてい無いくところがないことを確認したあと、レバーの付きのシャワーノズルが取り付けられたホースを片付けた。

「綺麗な庭ですね」

通り掛かった小太りの中年女性が話しかけてきた。近くにとめてある自転車に乗っていたのだらう。荷台に椅子が取り付けられ、そこに五歳くらいの少女が座っていた。

「ありがとうございます」

典型的な都会っ子である少年はこういった近所付き合いのようなものが苦手だ。内心では早くいなくなつてほしいと思っていたが当たり障りのない言葉を言つて表面的には普通の人受けする少年のふりをした。しかしこの選択を少年はすぐに後悔することになる。

女性は少年に拒絶されていないと思つたのか、庭の中にまで入ってきた。少年も面倒なことになりそうだな、とは思つたもののこの辺りではこれが普通なのかもしれないと拒絶することはしなかった。ただ、女性が空中に手をヒラヒラさせている娘を自転車から下ろさないことがやけに気になった。

しばらくは当たり障りのない話をしながら少年と女性は庭を見ていた。

（悪い人じゃないのかもしれない）

そう思い始めていた少年だったが、それはすぐに裏切られる。

「それにしても美味しそうな土ね」

「・・・え？」

最初は自分の耳を疑った。しかし引越してきたばかりの庭にはまだ食べられるようなものは植えられていない。

少年が混乱しているのを気にもせず女性はしゃがみ込み、乱暴な手つきで芝を引き剥がして土をすくった。そして口に含む。よく噛んで、飲み込む。二口目。やはりよく噛み美味しそうに嚥下する。

みたび女性が土をすくったところで少年はようやく相手は“頭が可哀想な”人なのだと理解した。よくみれば自転車に残された少女も楽しそうに手を動かしている。手を振っているのかと思っていたが、明らかになかを追いかけている動きだ。まるで存在しない蝶でも見えているかのように。

「あなたも食べる？」

土を食っていた女性がすくった土を少年に差し出す。少年はその手を払いたい衝動に襲われたがグツとこらえた。そんなことをすればなにをされるか分からないという恐怖からだ。

「し、塩でもあれば食べられるかもしれないですね」

だから自分も女性の仲間だともいうように話を合わせた。

「そう？ お塩もつてきましようか？」

「いえ、結構です」

当然、少年に土を食べる習慣はない。当たり前のように尋ねられた好意は謹んで辞退した。

「それにしても本当によく整えられていますね」

「そ、そうですか」

「だから、これもよく踏んであげないと。あはは」

何もないのは寂しいと母親が植えた五本のコスモス。それが女性によって何度も踏み潰された。執拗に踏まれ蹴られたコスモスの茎は折れ、花びらも散ってしまった

これ以上関わるべきではないということは理解していたがあからさまな拒絶は相手を興奮させるかもしれない。そう考えた少年は早々に諦めて話を合わせながら女性が帰るのをひたすらに待った。

「あら、もうこんな時間。夕飯を作らないとね。あなたとはまたお

話したいわ。あは」

女性の表情だけ見れば常人と変わらないのだが、少年にはその顔が人間以外のナニカに見えていた。女性は一握の土を手にし、娘の待つ自転車に向かって歩いていった。

少年は既に暗くなってしまった空を見ながら無事に切り抜けられたことに安堵の息をもらした。

すると今度は庭の惨状に、そして無駄な時間を過ごしたことに無償に腹がたった。かといって八つ当たりをするような度胸のない少年は一度だけ乱暴に呟いた。

「土なんか食うわけないだろ・・・」

その瞬間に少年は走り出した。

「今なんて言ったあああああ!？」

そんな声が聞こえたからだ。

殺される。

そう思っで一心不乱に走る。後ろから女性が追いかけてくるのを感じながら十字路を何度か曲がり、物陰に座り込んだ。

これだけ逃げれば見つからないだろう、そもそも追いかけてもらえないかもしれない。そう考えてほっと一息つきながら軽く笑った。すぐに家に駆け込まなかった自分がバカみたいに思えたからだ。

「おにいーちゃん」

「は・・・？」

自分には妹などいない。そんなはずれなことを考えて現実を拒絶しようとする。

「みいつけた」

先ほどの親子の娘の方だ。よくみれば子供らしい可愛さがある。しかしその目は焦点があっていなかった。

少年は本能的な恐怖に身を振るわせ、座ったまま必死にあとずさる。しかし曲がり角の向こうから現れた女性にとびかかれ馬乗りになられてしまう。勢いよく押し倒され息が詰まる。

女性の目は既に正気ではない。表情は楽しくて仕方がないという

な酸味を感じない。

「しんじゆうこくみんとうばんざーい」

「新自由国民党万歳！」

酸味の代わりにあるのは鉄錆臭さ。既に女性の重さは百キロを超しているのではないかと思っていた少年にとって内臓が潰されたのだと理解するのは容易だった。

「しんじゆうこくみんとうばんざーい」

「新自由国民党万歳！」

急速に霞む意識の中で女性たちがよく分からないことを喚いているのが聞こえた。

まともに頭も働かず、思考が乱れていく。乱れた思考は五歳程度にしか見えない少女を六十五歳と思い込み、自分は新自由国民党に勧誘されているのだと分かった。

生きるために少年は血を吐きながら呟く。

「しんじゆうこくみんとう に いれて ください」

…

…

…

少年が救急車にのせられる。

気付いたときには親子は消えていた。

救急隊員らしき二人組が何か言っているがいまいち理解できない。窓を塞ぐカーテンの隙間から青い光でてらしだされた夜の町を見て、

「ああ、助かったんだ」

と、少年は呟いた。

（後書き）

「なあ、新自由国民党って知ってるか？」

初ホラーです。

ホラーというよりは意味怖ものですけどね。
いや、実際はこんな夢を見たっただけです。怖かった

「ああ、先週運ばれてきた男の子の妄想だろ？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5651y/>

青光

2011年11月17日03時30分発行